



2015.6.1

6月 ちとせだより

幼保連携型認定こども園
神戸YMCAちとせ幼稚園

鯨岡 峻氏（京都大学名誉教授）は、「両義性の発達心理学」の中で次のように述べています。
「子ども自身が、自分の意志を持ち、『自分はこうしたい』『こうしてほしい』という気持ちを表現すること、表現できるようになることは、大切な成長です。また、同年代の子どもとの出会いの中で、人間そのものに対する興味も深まり、『自分も一緒にいたい』『一緒にしたい』という気持ちも芽生えてきます。しかし、自分の気持ちを表現することは、自分勝手な振る舞いに繋がりがねず、『みんなと一緒に』という気持ちを実現するときの関わり方とは、相容れない場合もあるわけです。また逆に、『みんなと一緒に』を求めるときには、みんなに合わせることに気を使い、自分の気持ちを引っ込めざるを得ないということにもなりかねません。このような自己矛盾を持ち、あえてその二面性をバランス良く充実させていくことこそ、一個の主体として生きるといふことの意味であり、そのどちらかに傾斜することは、望ましい主体としてのあり方ではないわけです。」

家庭・家族の中では、何でも自分の思い通りになってきた子どもたちが幼稚園という環境の中では、様々な気持ちを味わうこととなります。まず、最初に家族とは異なる様々な他者に出会います。幼稚園では、自らの思いを口にする前に手を差し伸べてくれる親はいませんし、そこにあるおもちゃを独占することも出来ません。他の子どもが使っているおもちゃで遊びたいと思って、何も言わずに手を伸ばすと反発に会うかも知れません。しかし、そんな中で生活するからこそ、どうすれば自分の気持ちを相手に伝え、同時に相手の気持ちをどう受け止めていくことが出来るのかといった、まさしく他者と共に生活していくための方法を学んでいくのだらうと思います。そこでは、自分の思い通りにはならないもどかしさや、自分の思いを受け止めてもらえない悔しさも経験するでしょうし、また反対に自分の気持ちを理解してもらったうれしさも経験することでしょう。このような、喜怒哀楽といった感情体験も子どもは子どもの世界の中で、子ども同士の価値観の中で経験するからこそ成長に役立つのです。同じ趣味思考であるからこそ、おもちゃの取り合いにもなりますし、たとえそこでどちらかが、またどちらもが、悔しくて、またなぜ相手が泣き出したかが理解できなくて泣き出したとしても、しばらくすると泣き止んで、また同じようにくっついて遊び始めるのです。

現代社会では、物事を瞬時に判断するいわゆるデジタル思考が求められるのかも知れませんが、人間関係においては、単に正しいか、間違っているか、好きか嫌いか、といった単純な判断基準では解決出来ない事柄が多く存在していることも事実です。子どもたちは、子どもの世界の中で遊びという場面を通して他者と関わり、ぶつかり、そして何とか折り合いをつけていく方法も身に着けていくのです。

多様な価値観が存在する現代社会であるからこそ、二者択一の発想を超えた、相矛盾する非効率的な思考や時間をかけた対話が必要とされているのですが、そういった価値観が形成されていくためにも、大人の価値観とは異なる、子ども同士の豊かな関わり方の経験が必要であることを忘れないでいたいと思います。

年主題 『平和』をつくる

<年主題聖句> 「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」

(マタイによる福音書5章9節)

6月主題 「動き出す」

聖句 “ 実に、キリストはわたしたちの平和であります。 ”

(エフェソの信徒への手紙2章14節a)